



FD NEWSLETTER

CENTER FOR
TEACHING AND
LEARNING

INTERNATIONAL
CHRISTIAN
UNIVERSITY

TOKYO, JAPAN

Vol. 25

No. 2

February 2021



目次

1. 大学におけるライティング支援オンライン化の動向とICUにおける
取り組み ... 1
2. Grammarly アプリを活用した英文レポートの執筆 ... 6
3. 学生の参加を促すオンライン授業での Slack の活用 ... 10
4. 第6回「CTL Brown Bag Lunch & Learn」
現実とバーチャルを繋ぐ電子黒板の世界－ハイブリッド授業に向けて
... 14
5. Oxford EMI トレーニングプログラム ... 16
6. 編集後記 ... 18

大学におけるライティング支援オンライン化の動向と ICUにおける取り組み

グローバル言語教育研究センター

相場 いぶき

はじめに

大学教育において学生の「書く力」を高めることが重要な課題であることは言うまでもなく、授業以外の場でもさまざまな支援が求められています。未だ収束が見通せないコロナ禍は急激に授業のオンライン化を促しただけでなく、大学におけるライティング支援の在り方にも大きな影響を与えました。本稿では、2020年10月10日に行われた[グローバル言語教育研究センター](#)主催講演会「大学ライティングセンターのニュー・ノーマル—個別相談によるライティング支援に焦点を置いて—」の話題提供としてまとめた資料を中心に、秋学期までの本学ライティングサポートデスク（以下 WSD）の取り組みと今後の可能性について述べます。

1. 大学におけるライティング支援の概要とオンライン化の動向

日本国内の大学にライティングセンターが設置され始めたのは2000年代に入ってからのもので、その草分けは2004年に開設された早稲田大学ライティングセンターであると言われています¹⁾。本学のWSDもまたその理念である「書き手の成長を促す」を踏襲し、2010年に図書館機能の一部として開設され²⁾、2018年に学修・教育センター（Center for Teaching and Learning）の管轄下に移り現在に至っています。大学のライティングセンターで支援の中核を担うのはピア・サポーターとしての大学院生で、本学のWSDにおいても添削や修正を行わず、対話を通じて書き手の気づきを促すライティング支援が行われています。

ライティング支援を担う機関は一般的にライティングセンターと呼ばれますが、その規模や機能は大学によって大きく異なり、名称も、ライティングサポートデスク、ライティングラボ等さまざまです。

日本国内にある大学ライティングセンターの正確な数を把握するのは大変難しいことですが、Writing Centers Association of Japan（以下 WCAJ）のウェブサイトには現在、ICU 高校を含む17校が挙げられています³⁾。さらに WCAJ 掲載校のウェブサイトを読めると合計26校のライティング支援機関にたどりつきます。2020年10月8日の時点で各校のウェブサイトに記載されている情報をもとにオンライン化の動向を探った結果は、次のとおりです。

まず、2020年春学期（または前期）以降オンラインによるライティング支援を実施したのは26校中15校でした。そのうち2校は部分的に対面によるライティング支援も実施しており、さらに1校は2020年以前からすでにオンラインによる支援を行っていました。また、使用ツールはZoomが最も多く7校で使用され、次いでGoogle Meetが3校、Microsoft Teams、Webex、Skypeがそれぞれ2校、Moodle Collaborateが1校で使用されています。これらはいくまでもウェブサイトに記載された情報を基にした動向であり、実際はさらに多くの大学がライティング支援のオンライン化に踏み切ったものと想像できます。

2. 2020年秋学期までの本学 WSD の取り組みと利用状況

2020年春学期授業のオンライン化に伴い、WSDにおけるライティング支援もすべてオンライン上で行われました。本学では3月の段階でZoomをプラットフォームとして使用する準備が整っていなかったため、すぐにセッションが行える状況にあったGoogle Meetを使用することになりました。しかし、授業ではZoomが多く用いられ学生も操作に慣れていることから、学期途中から個別にZoomでの対応も可能とし、秋学期からはすべてZoomを用いたオンラインセッションを行っています。

ライティング支援が対面からオンラインへと移行したものの、WSD における支援内容や手順に大きな変化はなく、セッションの予約やセッション後の利用アンケート等はこれまで同様オンラインで行われています。ただし、対面時に設定されていた予約不要のWalk-inセッションは春学期には行わず、秋学期からは昼休みに限定し Zoom を用いて行われています。

一方、使用ツールの変化に伴い、資料の共有方法には変化が見られました。具体的には、これまでチューターと利用者が紙で共有していた文書を Google Drive を用いて双方のパソコン画面で共有する、書籍の検索に関する情報のリンクを Zoom のチャット機能を用いて伝えるなどの方法です。これらは慣れてしまうと大変便利であるとの声がチューターと利用者双方から上がっており、プラスの変化であったと言えます。

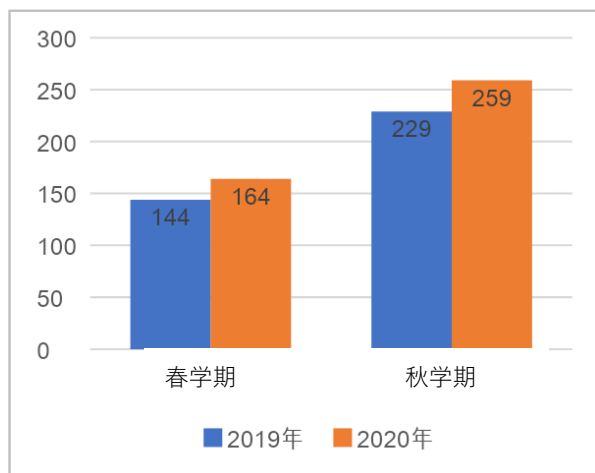


図1 WSD 利用状況(予約セッション件数)

WSD におけるライティング支援のオンライン化に伴い、当初は利用件数の伸び悩みが懸念されました。しかし実際の春学期における利用状況は前年を上回る結果となりました(図1)。学期ごとに比較すると、2019年春学期は延べ利用件数が144件であったのに対し、2020年春学期は164件で、前年に比べ約14%の増加となっています。このような利用件数の増加傾向は秋学期も続いており、Walk-inセッションを除く予約セッションの延べ利用件数は、2019年の229件に対し2020年は259件で、前年より約13%増えています。

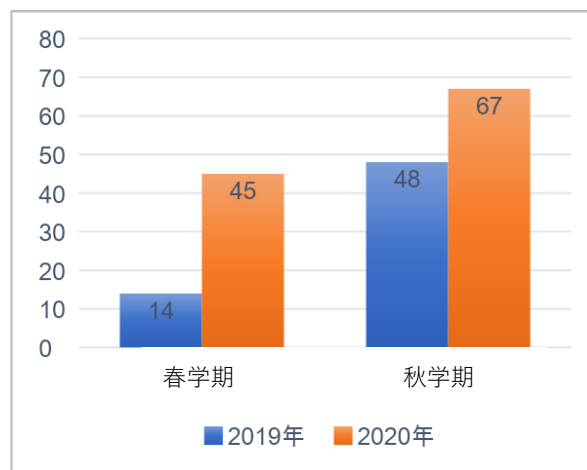


図2 学部一年生のWSD 利用状況(予約セッション件数)

春学期に比べ秋学期の利用件数が増加する傾向の要因としては、学部4年生の卒業論文に関する相談件数が多い時期であることが挙げられます。さらに2020年度に関しては、学部一年生のWSD利用件数が2019年度より格段に伸びている点がこれまでの傾向と大きく異なります(図2)。例年春学期は一年生の利用が少なく、2019年はわずか14件であったのに対し、2020年は45件と大きく利用件数を伸ばしています。秋学期も同様に、2019年の48件に対し、2020年は67件と増加傾向にあります。特に2020年春学期は、入学後一度もキャンパスを訪れたことがない一年生が与えられたレポート課題の質を高めようと手探りをした結果、WSDのライティング支援の利用につながったケースが多く見られました。入学以来リモート環境にある新一年生の利用増加は、今後のWSDの役割を考える上で多くの示唆を与えてくれました。

3. WSD チューターおよび利用者へのアンケート結果

以上のような変化に伴い、チューターと利用者双方の意見をもとにライティング支援のオンライン化における利点と問題点を探る必要性を感じ、アンケート調査を行いました(表1、P.4)。調査には Google Forms を用い、春学期と秋学期それぞれのセッション終了後対象者にメールで回答を呼びかけました。以下がその結果の概要ですが、質問事項と回答は紙幅の都合上、春学期の結果のみ記載します⁴⁾。

アンケート調査の結果から、チューター、利用者ともに WSD におけるライティング支援のオンライン化に好意的な反応を示しており、今後も継続を希望していることがわかりました。また、問題があるとしてもその多くはパソコン操作等のテクニカルなもので、ライティング支援の内容に関する大きな問題は見られませんでした。さらに、利用者側からはオンラインの方がハードルが低いとの意見も寄せられており、対面時より利便性が高いこともうかがえました。

なお、アンケートへの回答率が低い理由には、学期終了後帰国または卒業した学生がいたこと、WSD では他にも多種のアンケートを行っており、本アンケートへの回答は任意であったことなどが挙げられます。しかし全ての学生から回答が得られた訳ではないものの、結果からは今後の WSD におけるライティング支援の可能性や方向性が見えてきました。

4. 今後の可能性

ライティング支援のオンライン化に伴うこれまでの取り組みとアンケート調査の結果から、私見ではありますが、今後の WSD の可能性を以下に示します。

1) 対面授業再開後のオンラインセッションの継続

対面セッションと併用することで、チューターと利用者双方の利便性を高める。

2) 多様なニーズへの対応

一年生の学習支援としてのニーズ、自己管理スキルや大学への所属意識を高める手段としてのニーズ、授業のオンライン化に伴うライティング課題の変化に対するニーズ等への対応。

3) 他大学のライティング支援機関との情報交換

オンライン会議等により、他大学のライティング支援者（チューター、スタッフ、教員）との情報交換の機会を増やす。

2) の「自己管理スキルや大学への所属意識を高める手段としてのニーズ」は、アンケート調査では拾いきれなかった利用者の声を聞くために行った

インタビュー（ユニークユーザー2名対象、2020年7月10日実施）によるもので、WSDの定期的な利用がリモート時でも大学の環境を再現することにつながったとのことでした。また、3) に関しては10月のグローバル言語教育研究センター主催講演会にご参加いただいた方々から、本学 WSD との連携や情報交換を望む声をいただいたことから、今後の可能性として挙げました。

ライティング支援のオンライン化が続いたとしても、「書き手の成長を促す」という WSD の理念は変わりません。オンラインセッションという選択肢が増えることにより、今後書き手の学習ストラテジーの一つに WSD が戦略的に取り込まれ、さらなる成長につながってゆくことを期待しています。

おわりに

WSD には現在、様々なバックグラウンドを持つ大学院生チューターが 27 名所属し、冬学期からは初めて学部生チューター3名が ELA 課題のサポートを行う予定です⁵⁾。現在はオンライン化によって全員が一堂に集うことはできませんが、Zoom によるチューター会議や研修では、日本語と英語による活発な意見交換がなされています。今後は本来の役割であるライティング支援はもちろんのこと、本学の多様性を体現する場として、また、授業のオンライン化によって孤立しがちな学生の不安を和らげる心理的な支えとして、さらにその存在意義を示してゆきたいと思えます。

1. 佐渡島沙織・太田裕子 (2013) 『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
2. 畠山珠美 (2011) 「ライティング・センター：構想から実現へ」『情報の科学と技術 61 巻 12 号』, pp.483-488
3. Writing Centers Association of Japan
<https://sites.google.com/site/wcajapan/>
4. 2020 年秋学期終了後に行ったアンケート調査の質問項目は春学期とほぼ同じであるが、対面時だけでなく春学期との比較も考慮した上で回答してもらった。結果には春学期とほぼ同様の傾向が見られ、チューター、利用者ともに WSD におけるライティング支援のオンライン化には好意的であった。
5. 2020 年春学期より開講の ELG301:The Foundations of Tutoring Academic Writing 修了者に限定し任用。

表1 WSD ライティング支援のオンライン化に対するアンケート調査

	2020 年春学期	2020 年秋学期
調査期間	2020 年 7 月 8 日～同年 7 月 17 日	2020 年 11 月 24 日～同年 12 月 2 日
回答者(対象者)	チューター:8 名(28 名)*稼働 15 名 利用者:12 名(48 名)*ユニークユーザーのみ	チューター:11 名(27 名) 利用者:25 名(128 名)
使用言語	日本語・英語	日本語・英語
質問項目と回答 (春学期のみ)	<p>1-a. (チューターのみに対する質問)オンラインでのチュートリアルの準備の仕方や費やした時間は、対面時と異なりましたか。Did the preparation and the time you spent before online tutorials differ from those for face-to-face tutorials?</p> <p>チューターの回答: はい(Yes)37.5%、いいえ(No)62.5% 「はい」と答えた理由: 事前に文書を共有したことで必要以上に読み込むことが増えた、インターネットの接続や予約を入れるのに神経を使った、等</p> <p>1-b. (利用者のみに対する質問)今学期以前に、WSD で対面によるライティング・サポートを利用したことがありますか。Have you used face-to-face writing support at WSD before this semester?</p> <p>利用者の回答: はい(Yes)8.3%、いいえ(No)91.7%</p> <p>2. オンラインでのチュートリアルの流れや内容は、対面時と異なりましたか。Did the flow and content of online tutorials differ from those of face-to-face tutorials?</p> <p>チューターの回答: はい(Yes)62.5%、いいえ(No)37.5% 「はい」と答えた理由: 沈黙の時間を作りすぎると不安になり対面時より質問を多く投げかけた、テクニカルな面に多く気を取られた、等</p> <p>利用者の回答(1-b で「はい」と答えた 1 名のみ): はい(Yes)0%、いいえ(No)100%</p> <p>3. オンラインでのチュートリアルで、対面時にはない困難を感じた点がありますか。Did you find any difficulties in online tutorials that you did not have in face-to-face tutorials?</p> <p>チューターの回答: はい(Yes)75%、いいえ(No)25% 「はい」と答えた理由: 対面時以上に言葉で説明してもらう必要があった、スタッフや他のチューターに相談する機会がない、画面がフリーズし利用者の表情がつかめなかった、等</p> <p>利用者の回答: はい(Yes)16.7%、いいえ(No)83.3%</p> <p>4. オンラインでのチュートリアルで、対面時にはない良さを感じた点がありますか。Did you find any advantages for online tutorials compared with face-to-face tutorials?</p> <p>チューターの回答: はい(Yes)87.5%、いいえ(No)12.5% 「はい」と答えた理由: 気軽にできる、移動時間がなく大学に行かない日も対応できる、対面時は遅刻する利用者が多かったがオンラインではほとんどなかった、PC で画面共有するのは便利等</p> <p>利用者の回答: はい(Yes)58.3%、いいえ(No)41.7% 「はい」と答えた理由: コロナ禍でもセッションを受けられた、等</p> <p>5. 今後通常の対面授業に戻っても、オンラインでのチュートリアルを WSD の形態の一つとして継続すべきだと思いますか。Do you think that online tutorials should be continued as one of the styles of writing support at WSD even when the university goes back to regular face-to-face class style in the future?</p> <p>チューターの回答: はい(Yes)100%、いいえ(No)0% 「はい」と答えた理由: 慣れれば対面と大きく変わらない、便利だし利用者も増えそう、等</p> <p>利用者の回答: はい(Yes)91.7%、いいえ(No)8.3% 「はい」と答えた理由: オンラインだとハードルが低い、等</p> <p>6. オンラインでのチュートリアルに有効だったものがあれば教えてください。(パソコン機能、ウェブサイト、アプリ、書籍や記事など、何でも構いません。)Please tell us any useful tools you used for online tutorials. (Computer functions, websites, apps, books, articles, etc.)</p> <p>チューターの回答: チャット機能、メール、Google Docs、Google Scholar、ICU library、e-book 利用者の回答: Google Docs、パソコンの共有機能</p> <p>7. 今後オンラインでのチュートリアルにおいて、どのようなサポートがあればよいと思いますか。改善してほしい点なども含め、自由に述べてください。What support would you need for future online tutorials? Please feel free to mention anything you would like us to improve.</p> <p>チューターの回答: 学生からのフィードバック、チューターとオフィスとの連携強化、Google Meet ではなく Zoom を使用する 利用者の回答: なし</p>	

ライティングサポートデスク (WSD) について

学修・教育センターでは、[ライティングサポートデスク](#) (WSD) を通して、学生のライティング力の向上をサポートしています。ELA を含む各授業のレポート、論文、エッセイなど、分野を問わず幅広く相談に応じています。大学院生チューターが 40 分のチュートリアルの中で 1 対 1 でサポートを行い、学生は、テーマの選び方から論文構成、執筆ルールや文献収集についてアドバイスを受けることができます。文書の執筆言語、セッション言語については日英どちらにも対応しています。

この他、英文添削を行う[ブルーフリーディング](#)サービスがあります。こちらは学部生を対象とし、学生が自分の考えや議論を英語で明確に伝えられるよう、ブルーリーダーが適切な英語表現やより読みやすい英文になるよう提案を行います。

本学教員の皆様、ご質問等ありましたら、遠慮なく wsd@icu.ac.jp 宛てまでご連絡ください。ぜひ学生にもご紹介ください。

(WSD では、2020 年冬学期に学部生チューターがデビューしました。春学期に「ELG301:アカデミック・ライティングのためのチュータリングの基礎 (英語)」を修了し、ライティングのチュータリングを学んだ学生です。学部生チューターがサポートを行う対象は、同じく学部生の ELA コースの課題のみです。)



Grammarly アプリを活用した英文レポートの執筆



リベラルアーツ英語プログラム(ELA)
サイモン・エバンス

Grammarly Premium のご紹介

Grammarly は、英語で書かれた文書の様々な文法上の誤りや不適切な表現がないかどうかをチェックできるオンラインツールです。Grammarly の基本的なサービスは無料で利用できますが、ICU の学生や教職員は全員、文章の確認の際に便利なあらゆるチェック機能が充実している Grammarly Premium を利用することができます。この記事では、リベラルアーツ英語プログラム (ELA) プログラムにおいて、学生が Grammarly Premium についてどのように教えられているのかを簡単に紹介するとともに、その制限事項についても再考してみたいと思います。

背景

Grammarly Premium は、数年前から ICU 教職員や学生が利用できるようになっていました。ところが 2017 年に ELA を受けている多くの学生に話を聞いたところ、このツールが全く使われていないだけでなく、多くの学生がこのツールについて何も知らないことが明らかになりました。そこで、ELA の同僚である Asa Brinham 先生と一緒に、1 年生向けの ELA コースである「Academic Tools and Strategies (ATS)」の一環として行う一連の授業アクティビティを作成しました。これらのアクティビティは 2018 年の春に初めて実施されました。ELA を受けている 600 人以上の学生 (1 年生) のほぼ全員が春に ATS コースを受講することになっているため、2021 年の春学期が終わる頃には、ELA で学んだ ICU の学部生の大多数が以下の内容を教わっていることとなります。

1. Grammarly Premium へのアクセス方法
2. アカデミックライティングに最も適した Grammarly Premium の設定
3. アカデミックライティングのチェックに使用できる Grammarly Premium の機能
4. アカデミックライティングのチェックにおける Grammarly Premium の制限

この記事の残りの部分は、上記の 1~4 のトピックに基づいています。

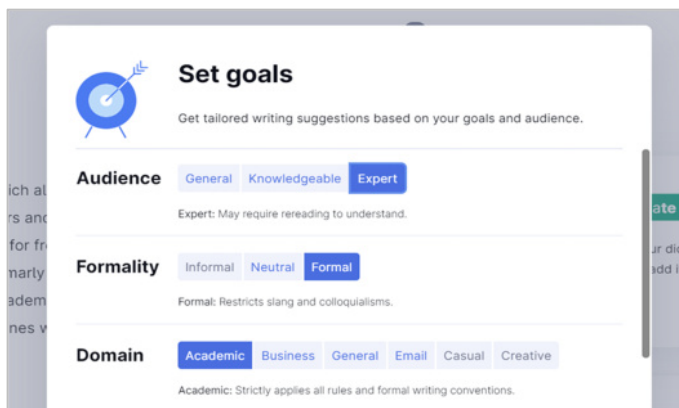
1. Grammarly Premium へのアクセス方法

ICU の教職員または学生の場合、Grammarly Premium のアカウントを作成するには、[ICU 図書館のホームページ](#)にアクセスし、「Tools/ Reference」/「お役立ちリソース・ツール」に移動してください。そこからは、画面の指示に従ってください。ICU の教職員および学生は、ICU の Gmail アカウントを使用して、Grammarly Premium にアクセスする必要があります。(アカウントの作成時に問題が発生した場合は、ICU 図書館にお問い合わせください。)

2. 設定の調整

Grammarly Premium アカウントの設定が完了し、Grammarly Premium で新規文書を作成したら、ドキュメントにテキストを貼り付けます。以下のような画面が表示されるので、文書の目的に応じて設定を変更することができます（図 1 参照）

図 1: Grammarly Premium での設定調整



3. Grammarly Premium の機能

Grammarly によってテキストが分析され、いくつかの「アラート」が生成されます（表 1 参照）。

表 1: Grammarly のアラートと識別されるエラーの種類

アラートの種類	考えられるエラーの種類
Correctness (正確さ)	文法、スペル、句読点、Grammarly 辞書に登録されていない単語
Clarity (明確さ)	冗長さ (wordiness) (長すぎる文、長すぎる段落)、受動態
Engagement (魅力)	意味の正確さ、同じ言葉の繰り返し、適切な言葉の選択
Delivery (言葉遣い)	語調と形式、短縮形の使用 (例: <i>don't</i> と <i>do not</i>)、人称代名詞、特定の書き方 (例: アカデミックライティングにおける <i>etc</i> の使用)

各アラートが識別され、考えられる問題の簡単な解説が表示されます（図 2~5 を参照）

図 2: 「correctness」のアラートとその解説の例

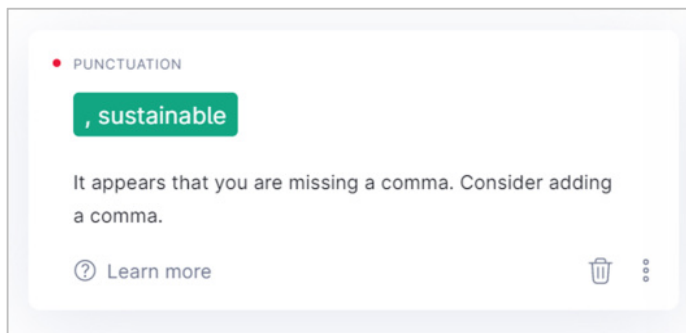


図 3:「clarity」のアラートとその解説の例

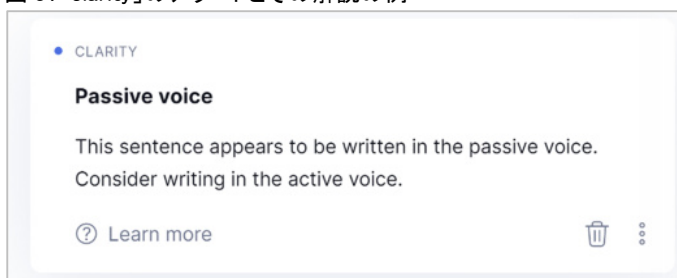


図 4:「engagement」のアラートとその解説の例

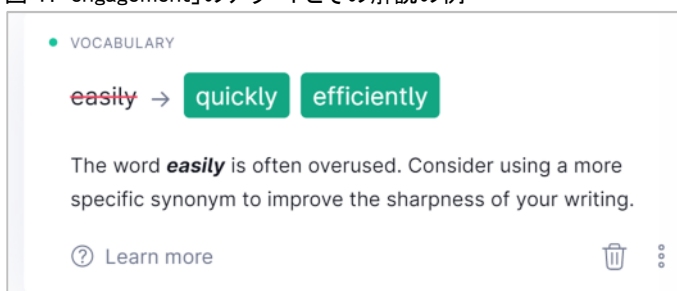
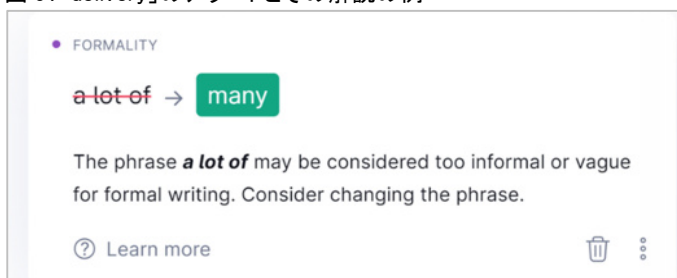


図 5:「delivery」のアラートとその解説の例



注意しなければならないのは、アラートはほとんどの場合、提案として提示される点です。言い換えれば、ユーザーはこの提案を受け入れるか拒否するかを判断する必要があるということです。アラートの多くには緑色の提案ボックスが表示され、これをクリックするとテキストが修正されます（図 2、4、5 を参照）。

4. 制限について

Grammarly Premium の主な「制限」は、答えを提供せず、代わりに「提案」を提供する点です。時にはその提案が不適切な場合もあり、これは ATS コースでも強調しています。特に、Grammarly では常に受動態の構文を避け、能動態の構文を使用するよう提案されます（図 3 参照）。例として、ある学生が最近書いた論文の次のような一文に「clarity」アラートが付き、その学生が私に質問をしてきました。

In fact, only 1% of disposed of clothing is ultimately recycled into new garments.

私が文章を修正して能動態で書き直したところ、Grammarly ではアラートが出ませんでした。

In fact, companies recycle only 1% of disposed clothing into new garments.

しかし、この論文の文脈（ファストファッションに関連する問題）において、受動態を使用することは非常に適切であり、リサイクル率が極めて低いことを強調しています。

さらに重要なのは、実験レポートの手法について記載する際など、分野によっては受動態の構文を使用することは避けられないということです。

私は先日、学生の Grammarly Premium の利用状況と認識に関する簡単なアンケート調査を行いました。回答者 38 人のうち、Grammarly を使っていないと答えたのは 1 人で、それも技術的な問題が理由でした。

Grammarly を利用している理由は何かという質問の典型的な回答として、「自分では思いつかない、または気づかないようなアドバイスをたくさん提案してくれるから」といった内容が寄せられました。また、6 人の回答者が、自分のアカデミックライティング能力に *自信* がなかったから使用したと回答しています。

別の質問では、提案に対する回答者の反応と、その提案によって混乱したかどうかを尋ねました。

多くの学生が、少し混乱したこと、そしてその後にアドバイスを受け入れるかどうかを選択したと回答しました。ある学生は「Grammarly からのアドバイスには不適切なものもあったので、状況に応じて受け入れるかどうかを判断していました」と記載しています。

私は、一見すると制限に見えますが、学生が言語を使用する際のニュアンスや微妙な違いにより敏感になるという意味で、ポジティブに捉えることができていると思います。また、混乱自体は必ずしも悪いものではありません。この混乱は、おそらく学生自身が持つ言語知識と Grammarly 内の情報が矛盾しているために生じているのだと思われます。これにより、与えられた文脈の中でどちらがより適切なのかという疑問が学生の頭の中で生じ、もっと知りたいという欲求が生まれてくるはずです。この欲求は一時的なものかもしれませんが、しかし、同じ疑問が何度も浮かべば、知りたいという欲求は強くなると考えても差し支えないでしょう。学生が最終的に教師（上述のファストファッションに関する受動態の文の場合）や [ライティングサポートデスク/ブルーフリーディング](#) のチューターのような誰かに質問した際に、学びが生まれるかもしれません。

まとめ

ELA の学生、すなわち ICU の学部生の大半は Grammarly Premium について知っており、その長所と短所についての基本的な知識を持っています。それだけでなく、ELA 教員はフォーマルなライティングの課題の提出前には必ず Grammarly Premium を使用してチェックするよう学生に促していますし、一部のクラスではライティング課題の成績評価ループリックに Grammarly Premium が追加されています。しかし、上述した理由から、Grammarly Premium を使ったからといって、エラーのないライティングが当たり前になるわけではありません。幸いなことに、ICU の学生はこれを比較的快適に利用できていることがデータで示されているため、すべての先生方に、英語のライティング課題を提出する前には Grammarly を使うことを学生に伝えることをお勧めしたいと思います。

学生の参加を促すオンライン授業での Slack の活用



心理学・言語学部門

李 勝勲

1. 背景

Slack は、チームメンバー間のコミュニケーションを効果的に行えるように設計された、チームワーク用のオンラインプラットフォームです。COVID-19 によるパンデミックの影響で、2020 年 4 月に ICU のすべての授業をオンラインプラットフォームに移行することが決定した際、最初の 2 週間はリーディングをベースとした講義を行うよう指定されました。この指定は、私が受け持っていた「Introduction to Linguistics 2 (LNG102)」というコースにとっては大きな課題でした。なぜなら、このコースの冒頭 2 週間では、多くの学生にとって複雑な、言語学の哲学的背景に焦点を当てているためです。そのため、メールでのコミュニケーションが主な、リーディングのみの授業は、学生にとっても理想的ではありませんでした。

学生達と同期的に直接コミュニケーションを行えるプラットフォームを探していたところ、会津大学の Julián Villegas 博士から Slack というプラットフォームを試してみてもどうかとご提案いただきました。多様なプロジェクトに協力して取り組む学生にとって、Slack は効果的なコミュニケーションプラットフォームです。私はすぐに、このプラットフォームがリーディング資料の共有、課題の受け取り、オンライン試験の管理と採点に使用している

図1 チャンネルとDM

Moodle を補完する良いツールになることに気付きました。

2020 年の春学期では、Slack を活用することで、学生との授業内コミュニケーションを効率化、および整理することに成功しました。本レポートでは、LNG102 の授業の最初の 2 週間に Slack をどのように活用したかを文書化し、共有したいと思います。

2. Slack の機能

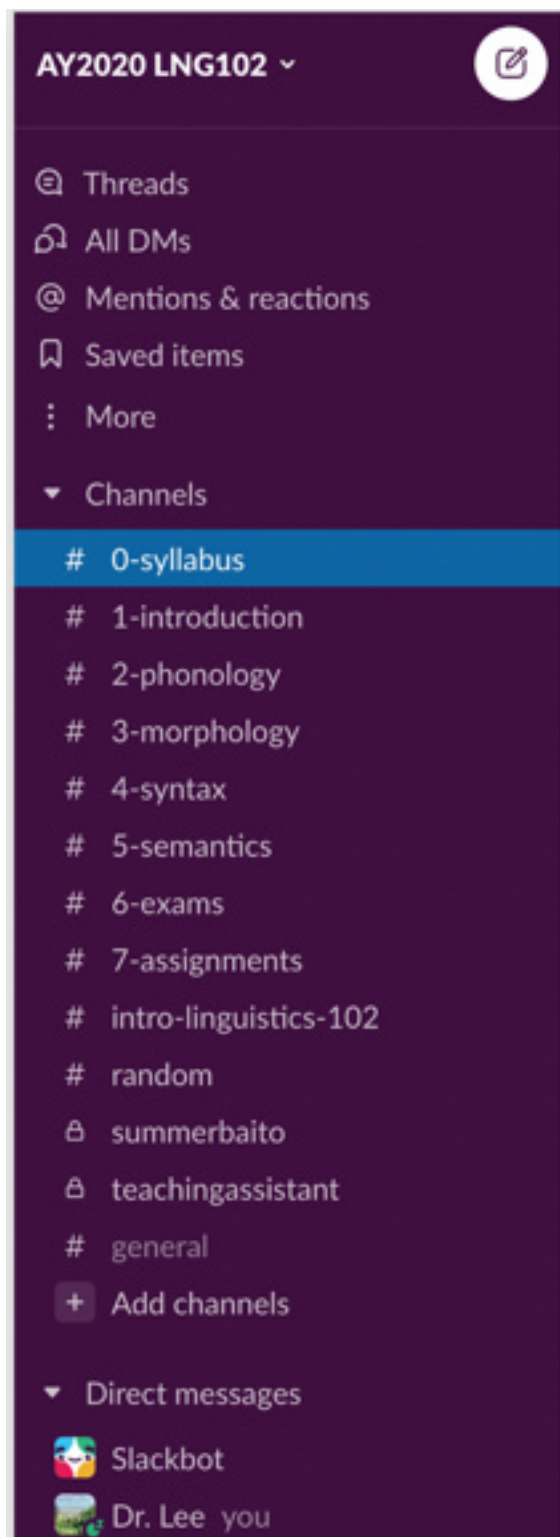
Slack の無料版は、www.slack.com からダウンロードできます。Slack プラットフォームに登録した後、ユーザーは、3つの方法（Web ブラウザーを使用する、デスクトップ アプリケーションをインストールする、スマートフォン用アプリケーションをインストールする）で Slack を使用することができます。Slack は、プロジェクトの基本単位であるワークスペース（今回の場合は授業）で構成されています。Slack のインターフェイスは現在、日本語を含む 8 つの言語に対応しています。

Slack を授業で利用する際は、図 1 (P.11) に示すようなオープンチャンネル、プライベートチャンネル、ダイレクトメッセージという 3 つの機能を主に利用しています。

オープンチャンネルは、ハッシュタグ (#) 付きで作成され、テーマに沿ったチャンネルを作成することができます。これらのチャンネルは、学生が質問をしたり、学生同士のディスカッションを促すためにも利用されています。

鍵マークが付けられたプライベート チャンネルは、ティーチングアシスタントとのコミュニケーションのために作成されており、授業に関する問題があればそこで質問できるようにしています。

学生と教員間のコミュニケーションには、メールの代わりにダイレクトメッセージ (DM) が使われています。オンライン授業を行うということは、すなわちメールでのコミュニケーションが増えることを意味しますが、Slack を利用することで学生と



のコミュニケーションを簡単に把握できるようになりました。

Slack を初めて使う方向けに、いくつかのヒントを次に共有します。

Slack は、Web ブラウザー、あるいはデスクトップやスマートフォンのアプリケーションからアク

セスすることができます。Web ブラウザーではワークスペースを個別のタブで開く必要があるため、3 つ以上のワークスペースを管理する場合は、アプリケーションを使用する方が楽だと感じました。

ワークスペースのアイコンには画像を使用することができますが、Slack が自動生成する際には、ワークスペースに使用している 2 単語の頭文字が使用されます。そのため、アカデミックイヤー (AY2020) とコース番号 (LNG) の単語からワークスペースを命名すると、すべてのワークスペースが AL と表現されることとなります。このような命名方法を避けることで、各ワークスペースを区別しやすくなります。

Slack では、ユーザーが特定のワークスペースの設定や環境設定をカスタマイズすることができるのですが、2 つのデフォルトの機能を変更することで、Slack をより使いやすくてできることに気がきました。

デフォルトのメッセージ送信用のインターフェイスでは、メッセージを入力した後に Return キー (Enter キー) を押す必要があります。このインターフェイスは、Slack を使用して改行されたメッセージを、繰り返し送信したい場合には不便です。メッセージの送信に使用できる別の設定として、CTRL キー + Enter キー (Windows コンピューターの場合)、または Command キー + Return キー (Mac コンピューターの場合) を使用する方法があります。この別の設定を使用することで、複数の改行が必要なメッセージを簡単に送信することができます。

学生を Slack に招待するのは簡単です。学生は招待メールを受け取るか、Slack で生成されたリンクから直接ワークスペースに参加することができます。このリンクは通常 30 日間のみ有効です。

3. ケーススタディ: 2020 年秋の LNG102

初日の授業は、図 2 のようなメッセージから始まりました。ティーチングアシスタントもメッセージを残しています。学生はチャンネル間を移動することで、授業計画などの様々な情報にアクセスすることもできます。シラバスとスケジュールは Moodle へのリンクを使用して共有されているため、

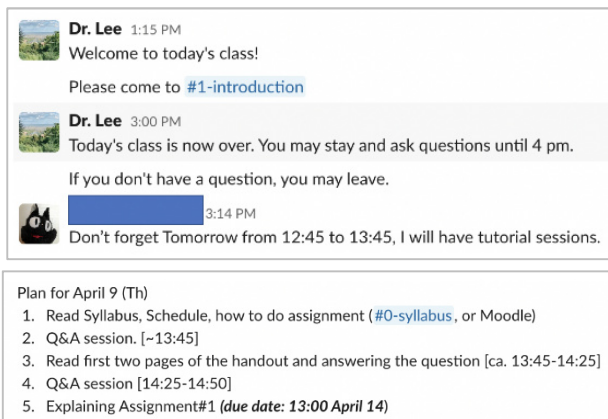


図 2 初日の授業挨拶(上)と授業の編成のアナウンスメント(下)

学生は Slack と Moodle の両方にアクセスできるようになっています。

授業初日、課題の配布物を確認した後、学生はオープンチャンネルやダイレクトメッセージを使って質問を開始しました。

各メッセージには、私が回答しました。ダイレクトメッセージとして質問が来た場合は、学生の身元がわからないよう学生の名前を消した上で、メッセージをオープンチャンネルにコピーし、それに対する回答は、各質問に対する返信メッセージとして作成しました。これにより、他の学生が同じようなトピックについて質問をする際は、この返信スレッドを拡張することができます。

この形式はまた、学生同士の交流を促してくれました。図 3 は、ある学生から質問された日本語の文章の曖昧さに関するトピックについて交わされた、学生同士のコミュニケーションの例を示しています。私がその曖昧さについてクラスメートに質問するよう伝えたところ、すぐに 24 件の返信が付いたスレッドができました。

すべてがオンラインで行われた初日の授業では、学生たちは授業のトピックに集中して取り組んでおり、この初回授業の最後にティーチング アシスタントは、まだ慣れないオンライン環境の中で学生達が盛んに参加していたことを見て驚きながらも喜んでいました。

私が初めて完全にオンラインで教えた授業は、2020 年の春学期に教えた Introduction to Linguistics 2 の授業でした。Slack プラットフォームを使用す

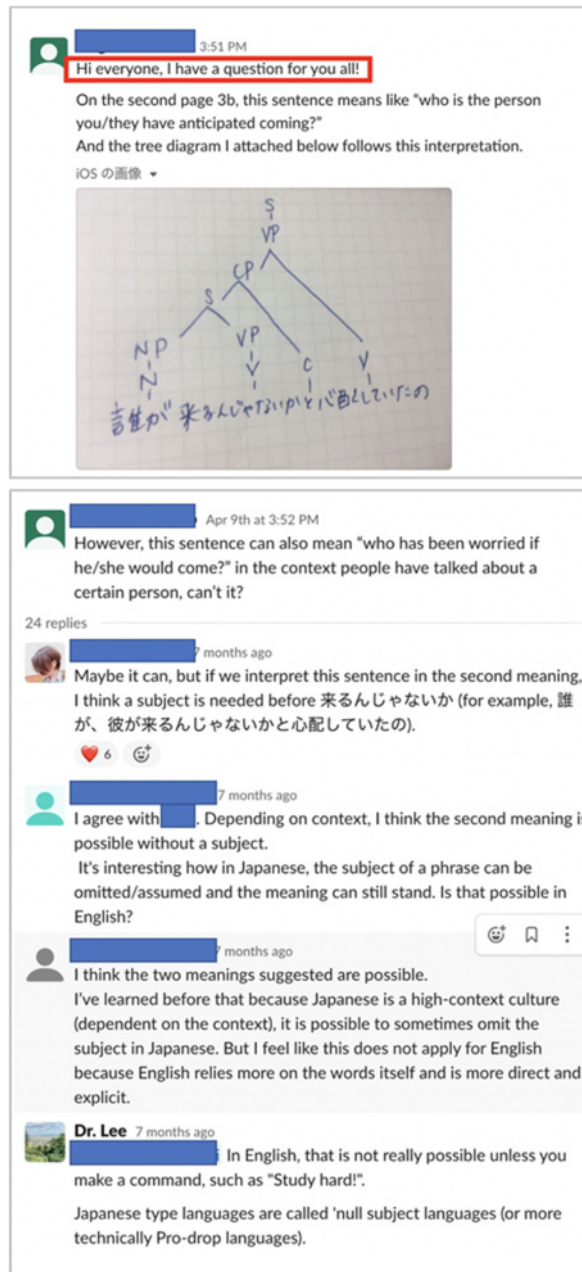


図 3 学生同士のコミュニケーションの一例

ることで、学生の積極的なエンゲージメントを維持することが可能となり、また、あらゆるコミュニケーションを行うためのメール対応を減らすことで、学生とのリアルタイムな直接のコミュニケーションを促進することができました。

4. 今後について

Slack、Moodle、Zoom を使った最初のオンライン授業を終えて、学生は多様なプラットフォームを柔軟に使いこなすことができることを知りました。

Slack は、学生とのメールを使った直接のコミュ

ニケーションを大幅に減らしつつ、学生の質問を検索可能な形で整理することができ、便利でした。また、チャンネルベースのコミュニケーションにより、学生同士の直接のコミュニケーションも増えました。

それでも、授業運営の他の側面を考えると、Slack には弱点があります。Slack には、課題やテストを管理するための統合的なプラットフォームがなく、採点機能もありません。学生は Slack を使って匿名の質問をすることができず、論文やプレゼンテーションの共同作業を直接行うことができません。これらには、ドキュメントやスプレッドシート、プレゼンテーションのオプションを提供する Google Suites などの他の方法が必要となります。

本レポートでは、Slack の様々な側面と、授業運営にどのように活用できるのかを紹介してきました。授業内容に関する学生と講師との間の直接のコミュニケーションが増えたことは、Slack の最も歓迎すべき点の一つでした。Slack のインターフェイスは、Instagram や Facebook などのソーシャルネットワークサービスに匹敵するものです。その結果、この親しみやすさが、学生との授業に Slack を取り入れることに成功した要因であると考えられます。

2020 年の秋学期や 2020 年の冬学期でも、学生間のディスカッションを促進するために Slack を使用し、授業でも質問を取り上げています。

第6回「CTL Brown Bag Lunch & Learn」

現実とバーチャルを繋ぐ電子黒板の世界－ハイブリッド授業に向けて

秋学期終盤、11月13日（金）に、CTL 運営委員会委員／FD 委員の青木浩幸先生（教育学・言語教育部門、教育学メジャー）が、6回目となる「Brown Bag Lunch & Learn」を担当してくださいました。電子黒板（Interactive Whiteboard）をテーマとし、参加者が、本館教室、学内研究室、自宅など様々な場所から同じ電子黒板にアクセスして交流を行う体験型のセッションとなりました。

最初に、今年本学に1台導入された電子黒板(BIG PAD:シャープ株式会社製 50V 型タッチディスプレイ)の特徴を紹介してくださいました。一見、普通の大形ディスプレイですが、タブレット端末のような画面のマルチタッチ操作により Windows や Mac 端末が直感的に使えるようになります。この電子黒板で Microsoft Whiteboard アプリを利用すると以下のようなことが可能です。

- ・ペンで文字や自由曲線の書き込みができる他、付箋やリストの利用、画像・文書・スライドを取り込める。書き込める広さに際限がなく、広い黒板としての使い方ができる。
- ・インターネットで紙面を共有し各自が見たい箇所を見られる。編集への参加で意見の投稿や「いいね」ボタンによる投票が可能。
- ・紙面上の要素は指で移動・回転・サイズ変更でき、見える範囲は2本指のピンチ操作やダブルタップでズームイン・ズームアウトできる。
- ・付箋による意見の集約がしやすい。
- ・出来上がった紙面全体を画像ファイルとして書き出せる。

次に、参加者を交えて Microsoft Whiteboard アプリを利用した2つの実践と、デモンストレーションを行ってくださいました。

実践(1) 付箋機能を利用した投票

「飼ってみたい動物」というテーマで、教員が「犬」「猫」という2つの付箋を用意。参加者は好きな方の付箋をタップし、表示されたメニューから「いいね」ボタンを押す*。

*現状では「いいね」ボタンはアプリ版のみの機能で Web 版では利用できなかった。

実践(2) 付箋機能を利用し、参加者の意見を聞く方法

「授業の長所・短所」というテーマで、教員が2つの場所を作り「スライドを使った授業」と「(電子黒板ではない従来の)黒板の授業」と書き込む。参加者はその書き込みの周りに意見を書き込んだ付箋を貼っていく。他の参加者が書き込みをしている様子を見られるので、自分も書こうという気持ちが沸き、大勢の参加者が書くことで授業の活性化につながる。アプリ版では、付箋の色を長所は赤、短所は青のように変えて区別できる。複数の付箋を簡条書きの形にリスト化する機能もある。



その他のデモンストレーション

- ・描いた四角形などの図形がきれいに整形されたり簡単に表を作れたりする設定オプションがある。書き込みは「なげなわ」や付箋に乗せてグループ化できる。

- ・スマートフォン上の Microsoft Whiteboard アプリ (iOS 版) で写真を撮影することで、実物を撮影したり、授業中に手書きのコメントシートを取り込んで電子黒板上の書き込み化 (線の抽出) したりできる。
 - ハイブリッド授業で対面の学生の意見も拾える。
- ・ Windows 版の Microsoft Whiteboard アプリでは「Bing 画像検索」機能でネット検索した画像を電子黒板に取り込むことができる。
 - スライドに準備していなかった画像を急遽追加でき、予想外の授業展開への対応に便利。
- ・ Mac 端末やアプリをインストールしない場合、ブラウザから Web 版を利用できる。ただし機能は限定的なため、現状では見えなくなるリストや表は使わない方が良い。
- ・ Microsoft Whiteboard の機能を最適に利用できるハードウェア「Surface Hub 2S」(Windows コンピュータ込み電子黒板)、類似製品「Google Jamboard」の紹介。

その他、実際の授業での使用例の紹介がありました。今回の青木先生のご説明と実演から、電子黒板を利用すれば、スライドを表示させて情報を伝達するだけでなく、学生たちの意見を吸い上げ、ライブ感があり、柔軟な授業展開を行うことが可能だということが分かりました。今後もオンライン・ハイブリッド授業が継続する可能性がある中、電子黒板は学生とのインタラクティブなやり取りをするための道具としてより活用されることが予想されます。

(学修・教育センター)

<本学教員向けの情報>

- ・ 電子黒板 BIG PAD は普段本館 215 教室にあります。利用を希望する本学教員は、本館ヘルプデスクに申し出てください。Mac ではドライバをインストールする必要があります。
- ・ ICU 教職員・学生は、Microsoft 社との契約により ICU Net ID で Microsoft Whiteboard アプリ (Windows 版, iOS 版, Web 版) が利用できます。現在組織外ユーザーとは共有できません。
- ・ セッションの動画 (約 50 分) を是非 [ICU-TV](#) でご覧ください。



図: デモンストレーションで作成した紙面全体を画像ファイルとして書き出したもの

Oxford EMI トレーニングプログラム



2020年9月にOxford EMI トレーニングプログラムがオンラインで開催され、本学から小澤先生が参加されました。本プログラムは、英語が非母国語の国での英語による授業の向上を目的としており、Oxford EMI Training 講師陣が英語による教授法をレクチャーするものです。小澤先生からプログラムの様子や感想をレポートしていただきます。

なお、本プログラムは、2018年8月、2019年3月は本学で実施しましたが、2020年3月以降はOxford EMI Training がオンラインで実施するプログラムに本学教員が参加する形をとっています。2021年3月に日本向けに実施されるオンラインプログラムも、教員の参加を予定しています。



日本語教育課程

小澤 伊久美

今回は日本の大学と韓国の大学で教えている、母語もキャリアも分野も異なる教員が11名参加しました。過去のニュースレターの参加者報告にも記載されているように、学生の学びを高めるために教授活動をいかに工夫するか、その分析の仕方や授業設計の仕方を具体的に体験的に取り上げる講座でした。

学んでいる内容を体現して指導する講師の言動を、まさに学生の立場になって観察しつつ、受講生らと相互にディスカッションし、日頃の自分の授業を振り返ることができたのは有意義な経験でした。中でも私にとって一番役に立ったのは学生側の経験ができたことです。特に COVID-19 で様々な問題を抱えつつ、同期・非同期の課題に外国語で取り組む中で、JLP の学生にとって何が学びを阻害

する要因になるか、つまりいた学生をいかに支援するかを考える良い機会となりました。

春に引き続き今回もオンラインでの講座でしたから、初対面の者同士がオンラインの集中コースで学ぶという状況で、学びのコミュニティを早期に構築することの重要性と難しさが特に印象に残っています。同期型授業が始まる前に、非同期の課題に取り組む中で関係性を構築すると良いこと、同期型セッションの中でも早く互いを仲間だと感じられる状況を形成する大切さを体験しました。この講座の受講生はみな教員で、受講意欲も高い者ばかりでしたので、比較的やりやすかったかもしれませんが、実際の授業では、より工夫が必要だとも思いました。これから授業をする上で、コース開始前後の学生への関わり方をさらに工夫したいと思います。

また、これも過去のニュースレターで指摘されていることですが、EMI の研修は、英語が苦手な教員に対して、いかに流暢な英語で授業ができるようになるかを支援する指導法を教えるものではありません。むしろ、授業で取り上げるコンテンツの理解や学生たちの思考を深める上で、教師の言語の使い方が、いかに学生の学びを促すか、あるいは阻害するかについての研修だと感じました。これは英語を媒介とする授業だけでなく、日本語や他言語による授業でも適用できる話です。

本学では JLP を履修中、あるいは履修を終えた学生達が日本語で開講されている JLP 以外の授業を履修していますし、ELA トラックの学生でも言語文化的に日本語にやや不安を覚える学生も増えているようです。学生が JLP でしっかり日本語を勉強するだけでなく、学部や大学院の科目において教師のインストラクションを工夫することで、学生がより深く学べる可能性があるということも EMI から学べると感じました。英語や日本語だけでなく、フランス語や韓国語など様々な教授言語の科目に応用すべきことだとも思います。

教師のインストラクションがいかに学生のエンゲージメントを高め、思考力を高め、成長させるかについて、教授言語に関係なく、より多くの教員が気軽に話し合える場があると良いのではないかと思った次第です。EMI 研修を受講した教員が増えていますし、研究領域としてもとこの分野に関心をお持ちの先生方もいらっしゃいますから、そうした方がハブとなってコミュニティができるといいなと思いました。

Oxford EMI Training: <https://www.oxfordemi.co.uk/>

EMI に関する過去の記事 (FD Newsletter)

FD Newsletter [Vol. 25 No. 1](#)、[Vol. 24 No. 1](#)、[Vol. 23 No. 2](#)、[Vol.22, No. 2](#)、[Vol.22, No. 1](#)

編集後記



「コロナの馬鹿野郎！」多くの方の悲痛な叫び声が日々聞こえてくるような気がします。諸悪の根源とされているウイルスですが、コロナの語源は「王冠」です。電子顕微鏡写真に写る突起物が王冠に見えることに由来しています。これまでに 6590 種のウイルスが同定されているそうですが、ヒトに感染するコロナウイルスはたったの 6 種（7 株）。しかも、そのうち 4 つは鼻風邪を引き起こす普通のかぜウイルスです（残りの 2 つは 21 世紀になって騒がれた SARS と MERS）。新型コロナウイルスの起源は未だ明らかにされていませんが、突然発生した「暴君」は世界を変えつつあります。今回の FD ニュースレターの記事も多くがコロナ関連になりました。年が改まりましたが、ウイルスとの闘いはしばらく続きそうです。

ウイルスとの闘いといっても、ウイルスは目に見えませんし、人格ありません。コロナ対策だけに気を取られすぎると一体何と闘っているのか分からなくなってしまうのではないのでしょうか。「正しく恐れる」とは寺田寅彦の言葉に由来すると言われていますが、コロナ禍の高等教育問題も正しく取り組まなければ本質からそれてしまうことになるかもしれません。この点において多角的にモノを眺め本質を見極めんとする ICU のリベラルアーツは強みを発揮できると信じます。今年も教職員の方々のご意見を伺いながら学生を支援していきたいと考えています。どうぞご意見などお寄せください。

学修・教育センター センター長
小瀬 博之

発行：国際基督教大学 学修・教育センター
Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University
1F, Othmer Library, 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422) 33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp